

猛暑、酷暑、炎暑 … どんな言葉を使っても表しきれないほど暑すぎる今夏。みなさまのご健康をお祈りいたします。クソ暑い日々に加えて、我が家(わたし)に大型台風が襲来しました。その名は「ヨブ台風」。おかげで、書いては悩み、書き直してはため息 … の毎日でした。今回は「人類史上最大の苦難を味わった人」とも言える人物を取りあげてみます。

👉 神さま、なぜあなたが創った世界に「悪」があるのですか？ (4)

『ヨブ記』とは

旧約聖書に42章にも及ぶ『ヨブ記』があります。1ページ上下二段構成で59ページにわたって書かれています。四福音書は『マタイ』60ページ、『マルコ』37ページ、『ルカ』63ページ、『ヨハネ』48ページですから、同じくらい、あるいはそれ以上のページ数が割かれています。

『ヨブ記』は二つの形式から構成されています。1～2章の「序」と42章7節から最後まで「結び」は、民間伝承を土台にした話が散文形式で書かれています。ここでは一人の立派な人(ヨブ)がサタンの試みによって受けた試練と、そこから彼が立ち直る物語が綴られています。それにはさまれた3章～42章6節にはヨブと友人たちの「対論」と、神さまの発言を加えたものが韻文形式で書かれ、これは著者(名前は不明ですが、紀元前5世紀ごろ生きたユダヤ人であるというのが通説)の独創的内容だと考えられています。長い物語なので、月本昭男先生(1948-。聖書学者、宗教学者。上智大学神学部特任教授。群馬県・新島学園高校～東京大学。1966年、私は新島学園を受験し合格。入学していたら2年先輩だった!)の夏期神学講習会における講義をまとめたノートなどを参考に、『ヨブ記』のあらすじをたどっていきます。〈文中、(3-1)は3章1節を表します。〉

ヨブの人物像とサタンがもたらした災い

ヨブは神を深く敬い、人間として非の打ちどころがなかったと言われます。七人の息子、三人の娘に恵まれていました。キリスト教では「七」と「三」という数字は完全性を意味するシンボルで、子宝は義人が受ける神さまからの祝福と考えられていました。さらに羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ロバ五百頭の家畜を飼い、使用人もたくさん雇っていた大富豪でした。

ある日、神さまの前に神の使いたちが集まり、その中にサタンもいました。神さまの世界には、神さまに仕える者たち、あるいは相談相手と言ってもいい存在がいたようです。「サタン」という日本語では「悪魔」と訳されます。ヨーロッパの絵画で鉤爪^{かぎづめ}を振りあげ、角^{つの}や牙、こうもりの翼などをもった恐ろしい姿の悪魔の絵が描かれることが多いのでご存知の方もいらっしゃるでしょう。「サタン」は神さまの相談相手としては悪魔的ではありません。一方、眼力がするどく「うわべ」と「裏」を見分ける力を発揮すると悪意的になり、いわゆる「悪魔」になるという二面性を持っていると北森嘉蔵師^{きたもりかぞう}は書いています。

神さまはサタンに「地上にヨブほど信仰の厚い者はおるまい。」と自慢しました。それを聞いたサタンは「神さま、ヨブはどうして正しい生活をしているとお思いですか？ 幸福になりたいからなんですよ。御利益^{ごりやく}目当てにきまっています。人はだれでも恵まれているからこそ神さまを大切に尊敬します。もし、愛しい家族や財産を失えば、神を呪うにちがいありません」と神さまを挑発します。そこで神さまは「彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には手

を出すな」とサタンに告げます。

ヨブに災いが次々と襲いかかりました。家畜が全滅し、牧童たちも殺されてしまったのです。さらに大風が吹きつけて家が倒れ、息子や娘たちも命を奪われてしまいました。私たちならこんなことが起これば、それこそ立ち上がれないほどのショックを受けるにちがいありません。それでもヨブは言いました。『わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。』(1-21)。ヨブは自分が本来「何ももたない存在」であり、自分に与えられるものも、自分が奪われるものも、すべて神さまがお決めになることだ — という信仰をもっていました。ヨブはこれほどの悲しみの中でも動じず、主なる神に従いました。『このような時にも、ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった』(1-22)のです。ヨブの信仰がどれほど堅いものだったかがわかります。サッカー日本代表の大迫クンが「半端ないって！」で一躍有名になりましたが、ヨブの「半端なさ」に比べれば問題になりません。遠藤周作氏の『沈黙』におけるキチジロー的な信仰の域を未だ脱していないわたしのような者にとっては、ヨブの揺るぎない信仰は人間業ではありません。

「これでもか！」— サタンがもたらした二度目の災い

ある日ふたたび、神さまの前に神の使いたちとサタンが集まりました。神さまはサタンに「お前は理由もなく、わたしを^{そそのか}唆して彼を破滅させようとしたが、彼はどこまでも無垢じゃないか」と言われました。そこでサタンは、『皮には皮を、と申します。まして命のためには全財産を差し出すものです。手を伸ばして彼の骨と肉に触れてごらんください。面と向かってあなたを呪うにちがいありません』(2-4, 5)と神さまを揺さぶります。サタンは、財産や子どもたちが失われたことは、ヨブにとってまだ「皮を切られた程度」の苦難でしかないと言います。でも「骨と肉」、つまり「自分の身体(健康)」が損なわれれば、持ちこたえられますかな？ と迫ったのです。人間は健康であればこそ神を畏れるもの。肉体が傷つけられれば、さすがのヨブでもあなたを呪うはずだと言うのです。ここでも神さまは「命だけは奪うな」と告げ、サタンの好きなようにさせました。神さまはサタンにヨブを試させるほど、彼の信仰の強さを認めていたということでしょう。

ヨブは頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病(伝承的には「癩病」と言われていますが、確証はありません。全身に広がるひどい腫物ということは確かです)にかかってしまいました。彼の妻は、素焼きのかげらで体中をかきむしるほど苦しむ夫を見て、『神を呪って、死ぬ方がましでしょう』(2-9)とヨブに言いました。ちょっと想像してみてください。陶片でかきむしるほどの腫物が、片手だけでもなく、片脚だけでもなく、身体中にできたのです。ふつうの人間なら七転八倒して、のたうち回るような症状です。ヨブはこれ以上ない絶望の中に放り込まれたのです。しかしそれでもヨブは、『わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか』(2-10)と言い、『彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった』(同前)のでした。

ここで北森師は、前述した1章22節『ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった』と、2章10節『唇をもって罪を犯すことをしなかった』の小さな表現の「ちがい」に注目します。二箇所とも、「ヨブは苦難にあっても罪を犯さなかった」と同じ内容なのですが、後者は『唇をもって』が加わっています。「唇」(言葉)では罪を犯さなかったのですが、「くちびる以外」のところ、つまり『「心の中」では何をしたかわからないというのが、言外に含まれている』と北森氏は指摘しています。「ヨブは言葉に出しては神を呪わないが、心の内では呪い始めますよ。そのうち、はっきり呪いの言葉を言い出しますよ」とサタンは予言していることを聖書は暗示していると北森師は書いています。そしてその指摘が「3章」から最終章までを読むと的確なことがわかってきます。

三人の友の来訪

案の定、『わたしの生まれた日は消えうせよ』(3-3)と、自分を生まれさせた神さまを呪う言葉を投げつけるようになったヨブのもとへ、三人の友人がやってきました。ヨブと友人たちとのやり取りは『ヨブ記』のほとんどを占めています(全59ページ中、51ページ)ので、その一部をご紹介します。(ごく一部ですので、聖書を読んでいただければ幸いです。)

この三人の友人たちは「因果応報的人生観」に立つ人たちです。「因果応報」についてはこれまで何回か説明しました。もう一度かんたんに復習してみましよう。仏教の世界では、世界が苦しみに満ちているのは「この世のすべてのものは絶えず移り変わって、変わらないものは何ひとつない(「無常」)にもかかわらず、人間はその世界の中であることに心を強く惹かれ、どうしてもその思いを捨てきれない(「執着」する)からだ」と説きます。そして、この世界の中で生きる人間の「心の在り方」を探求し、俗世間の戒め・迷い・苦しみなどから抜けだし、真の自由な境地に達する(「解脱」する)さまざまな方法を確立させていきました。たとえば、釈迦の説法にある「八正道」(正しい見解・決意・言葉・行為・生活・努力・思念・瞑想)を実践することや、禅宗の内観・自省により心性(すべての人間が生まれながらにもっている本性)の本源(根本、おおもと)を悟ろうとする座禅など、ご承知のとおりです。

これに対して『旧約聖書』に登場する人たちは、『苦の「原因」を探るのではなく、苦しむ「理由」を問い、苦難の「意味」を訊ねた』と月本先生は指摘します。そこから、「人間の罪に対する神の処罰としての苦難」という答を導き出したのです。人間の苦しみは、当人の「罪」に対する神からの「罰」であり、逆にしあわせな人生は正しく生きる人たちに与えられる「神の祝福」と考えたわけです。これがユダヤの「律法」と結びつき、イスラエ尔的な「因果応報論」が成立しました。ですから「なぜ自分がこんな苦しみに遭わなければならないのか？」と喘ぐ人々の問いの答は、「あなたか、家族か、それとも祖先が罪を犯したからだよ」と片づけられ、人生に起こる不条理はたやすく合理化されてしまうのです。

ヨブと友人たちの対話

友人たちはヨブがひどい苦難に襲われたのは、「お前になんらかの罪があったはずだ」、だから「神からの戒めを拒んではならない」(5-17)とヨブを攻めたてました。あるいは「神に従い、和解しなさい。そうすれば幸せになれる。神に立ち帰りなさい」(22-21、23)と促しました。ヨブが身の潔白を主張すればするほど、友人たちは「その主張こそお前を罪に定めているんだよ」と断定しました。ヨブは「そりゃあ少しは小さな罪は犯したかもしれないが、これほどの苦しみが与えられるようなことはしていない」と反論します。ヨブは「神に忠実にしたがう純粋で、けがれのない人間がなぜ、もの笑い種になるのか？」(12-4)、「神に逆らう者が生き永らえて、楽しく生きているのはどうしてなのか？」(21-7)などと、友人に疑問を投げかけ、抗議しました。34章からヨブの声を拾ってみます。

- ▶「わたしがむなしいものと共に歩き、この足が欺きの道を急いだことは、決してない。」(5節)
- ▶「目の向くままに心が動いたことは、決してない。」(7節)
- ▶「わたしが隣人の妻に心奪われたり、門で待ち伏せたりしたことは、決してない。」(9節)
- ▶「食べ物を独り占めにし、みなしごを飢えさせたことは、決してない。」(17節)
- ▶「財宝の多いことを喜び、自分の力を強大だと思ったことは、決してない。」(25節)

ヨブが友人たちに求めたのは、『彼の側に立ち、不当な仕打ちを課す神をとともに訴えることであ

って、苦難を説明してもらったことではなかった』と月本先生は指摘しています。ところが友人たちは因果応報説と神の正しさを振りかざしました。友人たちに対する期待は失望に終わったのです。彼らは『友の苦しみを自分たちの苦しみとして受け止められず、信仰の論理のほうを重視』したのです。

聞こえてきた神の声

さらにヨブは神さまにも訴えました。

- ▶「なぜ、わたしに狙いを定められるのですか。なぜ、わたしの罪を赦さず、悪を取り除いてくださらないのですか。」(7-20、21)
- ▶「罪と悪がどれほどわたしにあるのでしょうか。わたしの罪咎^{つみとが}を示してください。」(13-23)
- ▶「どこになお、わたしの希望があるのか。」(17-15)
- ▶「わたしは幸いを望んだのに、災いが来た。光を待っていたのに、闇が来た。」(30-26)

このように訴えつづけるヨブに、沈黙をつづけていた神さまはやっと『嵐の中からヨブに答えて仰せになった』(38-1)のです。神さまの声が響いたのです。ところがその声は、ヨブの疑問や訴えに対する「答」を当然おっしゃったのだらうという私たちの期待を裏切ります。その内容は、彼の憤りや訴えにまったく答えていないものでした。

「わたしが大地を据えたとき、お前はどこにいたのか」から始まり、「海が湧き出るところまで行って深淵の底を歩いたことがあるか」、「天の法則を知っているか」、「動物に食物を与えるのはだれか」、「野生のやぎが、いつ臨月になるかを知っているか」…等々、大地の創造から始まり、海～自然～天体～動物…に至る自分の〈創造の業^{わざ}の偉大さ〉を「あれもこれも、オレがやったことだ」、「どうだ、お前にできるか」と、ヨブの問いとはまったく関係ないこと、言ってみれば自分の「自慢話」をしゃべりまくります。ヨブはそんなことを聞きたかったわけではなかったはずです。

ところがヨブは『あなたは全能であり / 御旨^{みむね}の成就を妨げることはできないと悟りました。(中略) わたしは塵と灰の上に伏し / 自分を退け、悔い改めます』(42-2、6)と答えたのです。これも私たちにとっては「え～っ!?!」ですよね。なぜ彼はこんなことが言えたのでしょうか。

ヨブは、神さまに対して抗議の声をあげた傲慢な自分を反省し、悔い改めました。そして「全能」である神さまが小さく弱い存在でしかない自分を支え、人生のすべては神さまによって織りなされているという真理をあらためて心に刻んだのでした。悔い改めたからこそ、「絶望」の中から一筋の「希望」の光を見ることができたのです。

その後ヨブは、もとの境遇にもどされ、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭(以前の「2倍」!)の家畜を与えられ、また七人の息子と三人の娘を授かったのです。めでたし、メデタシ — で、この話を終わってしまったら「おいおい、『日本むかし…』、いや、『ユダヤむかし話』かい!?!」と叱られそうです。

『ヨブ記』の〈キーワード〉とは

『ヨブ記』をどう読むかについてはたくさんの解釈があります。来住^{きしひでとし}英俊神父の考え方をみていきましょう。来住神父は『ヨブ記』を読む際のキーワードは、「神との対話」であるといいます。とてつもない苦難に遭遇したヨブにとって、いちばんありがたかったことは『「神自身が語りかけてくれた」こと、そのもの』であったとします。また、なぜ神さまの語りかけによってヨブが絶望から希望を見出したのかを考えると、「時間の経過」が大事だったといいます。彼は友人たちに

反論したり、神さまに訴えたり、独白したりしました。それらはすべて『神に向けられたもの』であり、ヨブは神さまに語りかけ続けたことによって、彼の心はしだいに解放されていったのだと考えます。友人たちは神についていろいろ語りましたが、神とは対話しませんでした。それに対してヨブは神と語りつづけた — 。すなわち『ヨブ記』のメッセージは『人間の神に向かう態度について語っている』とします。まったく希望が見えない状況に追い込まれた人間が、それでも神さまへの信頼を棄てず、神さまが語りかける「そのとき」を待ち望む。「すぐに」ではないけれど、「いつか」を信じて耐え忍ぶ。それこそホンモノの「信仰」であることを『ヨブ記』は教えています。

私たちの〈小さなヨブ体験〉を重ねて、聴こえる「声」

月本先生は、嵐の中から響いた神さまの声は『ヨブのなかでは秩序世界が崩れ去ったようにみえても、神が創造した世界の秩序は厳然としていることを教えるもの』であり、『ヨブは、創造の秩序を支える神によって彼自身も支えられているということに気づかされた』のだと考えます。

私たちがヨブのようなすさまじい苦難に遭うようなことは、おそらくないでしょう。あつてほしくありません。でも、ヨブのようにではないにしろ、私たちの人生にも予測もしなかった出来事が起こりうることは確かです。「そのとき」に、自分の人生を支える「確かなもの」を私たちはもっているのでしょうか？ お金(経済的な安定)、家族、社会的役割、過去の業績、築いてきた人間関係…。これらは「人生の究極的な支え」になるのでしょうか。月本先生の講義は次のような言葉で締めくくられています。

先生は人生における究極的な確かさなど、じつはどこにもないのではないかと考えています。しかしそれでも、『それに気づき、勇気をもって虚空を見つめるとき、私たちもまたその虚空に響く神の声を聴きうるのではありませんか。創造の神によってこの弱く小さな存在が神によって支えられている。そのことにあらためて気づかされるのではありませんか。こうして私たちも、それぞれの仕方で、小さなヨブ体験をさせられるのではないかと思うのです』と、私たちに問いかけます。私たちはヨブの揺るぎない信仰に圧倒されるだけでなく、一人ひとりが「小さなヨブ体験」を重ねることで、自分を生かしてくださる存在に気づいていくのではないのでしょうか。どのような「絶望」の中にあつても、〈神の声〉は響いている、語りかけている — 。その声、「希望の声」を聴き得る耳とところを持ちたいと思います。

4回にわたって「自然がもたらす悪」について考えてきました。次回からはもう一つの悪である「道徳的な悪」、「人間がもたらす悪(悲惨さ)」について考えていきたいと思えます。

神さま。私たちが人生で出逢うさまざまな悩みや苦しきは、どうやら私たちを人間的に成長させるために、あなたが与えてくださるチャンスでもあることがわかってきました。〈真理〉を見つめる目を開かせるための試練 — とも言えましょうか。どうぞ、私たちがそれに耐え忍ぶことができるよう支え、導いてください。

(2018.08.31.)

【引用・参考にした書籍など】

- ・月本昭男 『絶望という希望 — ヨブの場合』 (『希望に照らされて 深き淵より —』2014年上智大学夏期神学講習会講演集より) (日本キリスト教団出版局、2015) 及び 講習会当日の「講義ノート」
- ・北森嘉蔵 『ヨブ記講話』 (教文館、2006)
- ・日本聖書協会 『聖書 旧約聖書続編・引照つき 新共同訳』
- ・来住英俊 『『ふしぎなキリスト教』と対話する』